

産官学民連携のキーパーソン 「ヒューマンコーチリーダー」 の展望と課題

地域コミュニティとAIが共創するまちづくり

2024年11月9日（土） 第19回日本応用老年学会 O-I -16

株式会社ミサワホーム総合研究所 フューチャーデザインセンター
大原亜砂子

国立大学法人東北大学 スマート・エイジング学際重点研究センター
石川美佳・阿部愛・鴻巣尚子・阿部愛実・オガワ淑水・瀧靖之



本日お届けする内容

- ① 概念実証期間中、同時に実践した
“ヒューマンコーチリーダー”の結果
- ② プロジェクト活動後のリーダーたち
- ③ ヒューマンコーチリーダー、ヒューマンコーチの今後
社会的処方:“リンクワーカー”に合致

この発表のベースは、総務省の戦略的情報通信研究開発推進事業（国際標準獲得型・令和2年度～5年度）です
日本のコンソーシアムは、総務省より助成金を受けています（助成金番号 JPJ000595）
EUのプロジェクトは、欧州連合H2020プログラムより、助成金契約番号 101016453 の助成金を受けています



背景・目的

人コミュニティとロボットが共に地域社会を形成

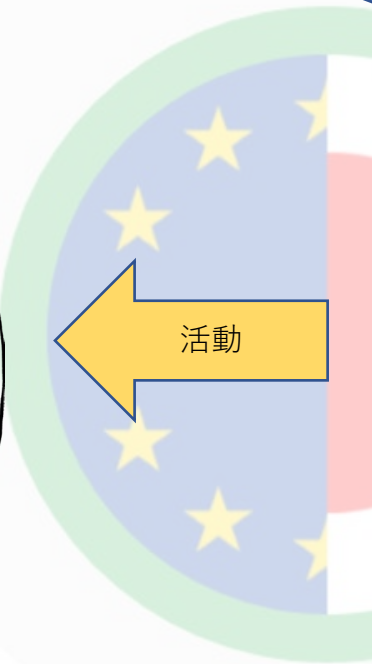
地域社会連携
 (地域包括支援センター・社協)
 地域の情報発信：
 ヒューマンコーチリーダー

地域関連データ

地域関連データ

AI
 情報通信機器

自立的な
 会話生成



ヒト

個人関連データ

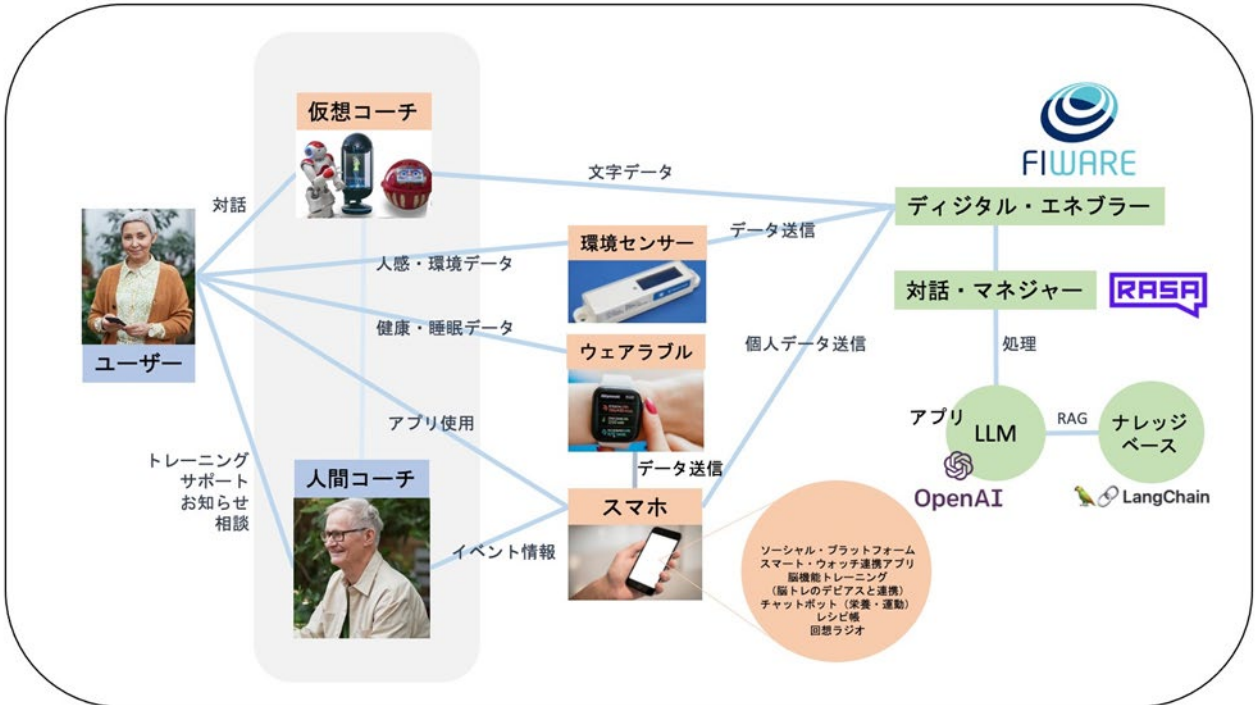
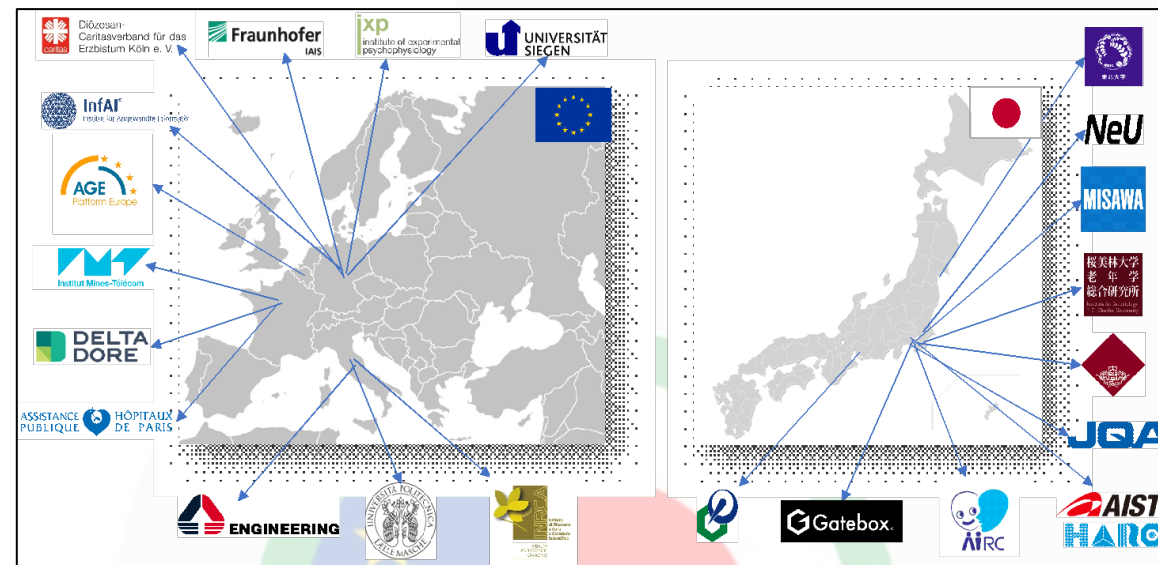
ヒューマンコーチ

個人関連データ

e-ViTAプロジェクト (EU-Japan Virtual Coach for Smart Ageing)

【研究開発課題名】
 スマートエイジングを目指す
 日欧共同仮想コーチングシステムの研究開発

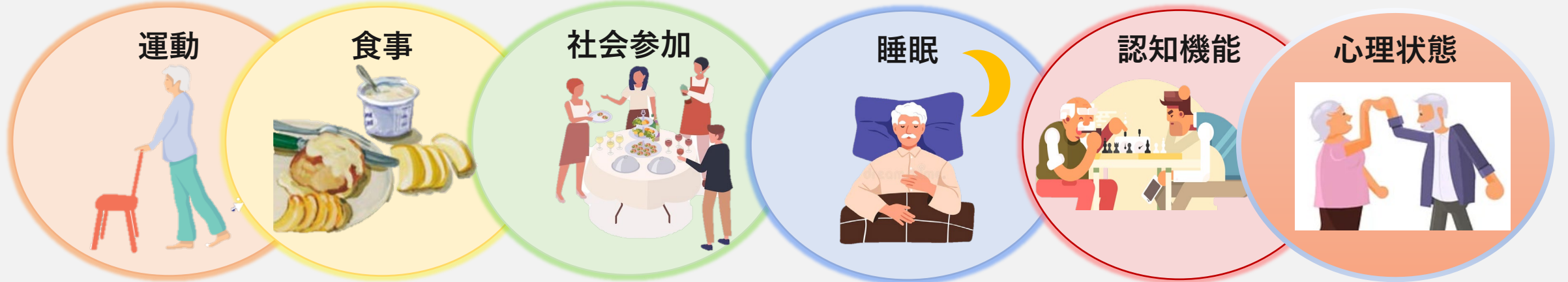
【目的】
 「アクティブ・ヘルシー・エイジング(AHA：活力ある健康的なエイジング)」の課題とされる認知機能、身体活動、心的健康、社会的交流の改善を図り、高齢者のウェルビーイングの向上を目指す



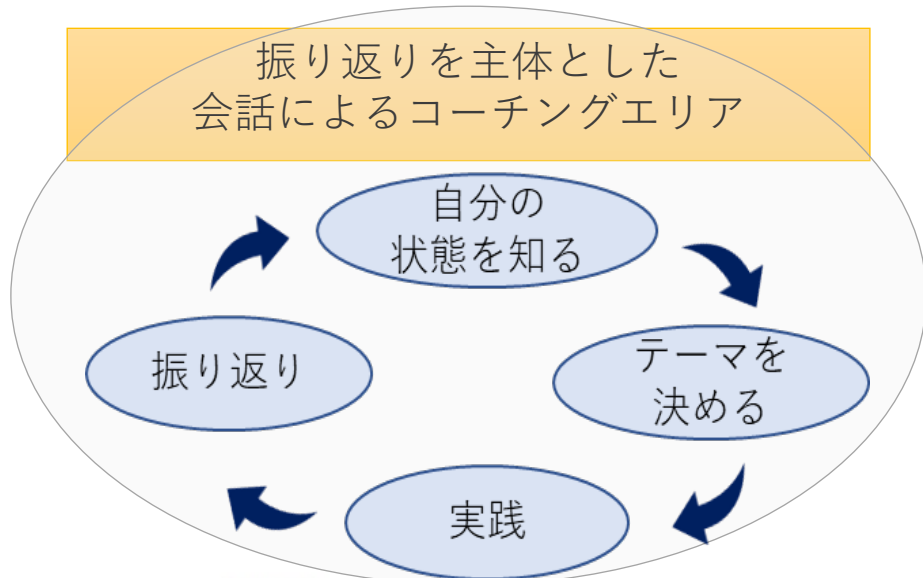
- 日本側コンソーシアム参加10機関：
- ・ 東北大学
 - ・ 早稲田大学
 - ・ 桜美林大学
 - ・ 芝浦工業大学
 - ・ 株式会社NeU
 - ・ 国立研究開発法人産業技術総合研究所
 - ・ 株式会社ミサワホーム総合研究所
 - ・ GATEBOX株式会社（2年間）
 - ・ 一般財団法人日本品質保証機構（2年間）
 - ・ 国立研究開発法人長寿医療研究センター（2年間）

e-ViTAプロジェクト (EU-Japan Virtual Coach for Smart Ageing)

6つの健康領域に関わるアドバイスは、日々のシームレスなロボットとの会話の中で伝えられる



生きがい、新たな挑戦意欲向上、ウェルビーイングにつなげる



自己決定理論をベースに作成した「e-ViTAコーチングサイクル」

e-ViTAシステムで用いた仮想コーチデバイス



ヒューマンコーチとヒューマンコーチリーダー

■ヒューマンコーチ

- ・仮想コーチおよび情報通信機器活用の高齢者ユーザー支援
- ・コーチング実施、高齢者ユーザーの意識や行動変容を促す

■ヒューマンコーチリーダー

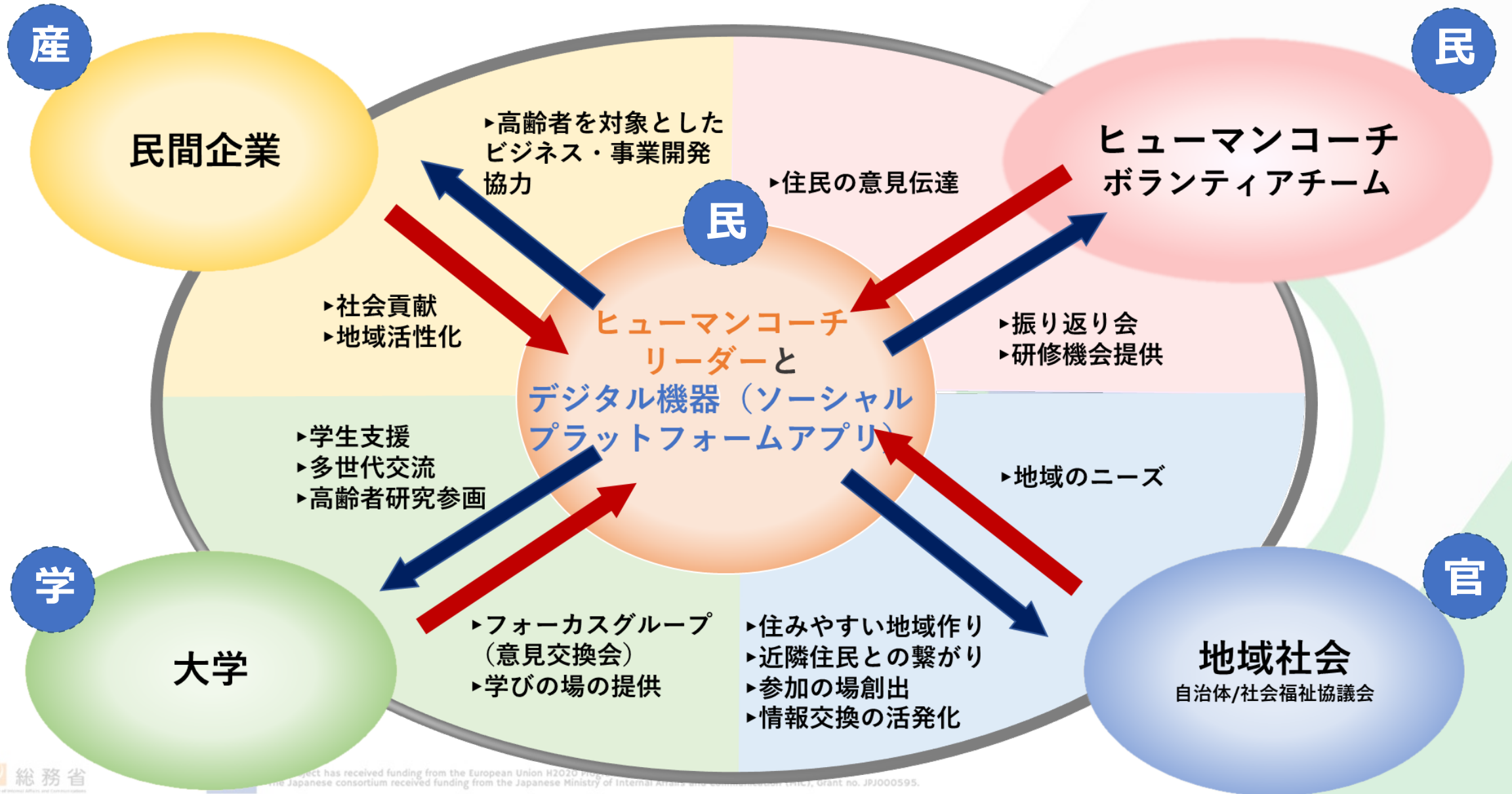
- ・ヒューマンコーチのリーダー、とりまとめ・相談役
- ・地域包括支援センター、ステークホルダーとの情報連携
仮想コーチへの情報入力、地域イベントの企画・実施



技術的サポート

相談役

ヒューマンコーチリーダーの役割





方法

【リーダー選出】

東北大学の実験協力ボランティア登録者から
70代男性2名

【役割の構築】

参加型デザイン手法

ヒューマンコーチの役割を明確にしていく過程で、コーチの動機付け、適切なサポートのあり方、リードの仕方に意見を出し合う探究形式

【効果測定】

リーダーの受容性：自己評価インタビュー（概念実証試験終了時）

リーダーの効果：

- ・高齢者ユーザー（27名）によるコーチの受容性
- ・企画した地域イベントの参加者数



方法

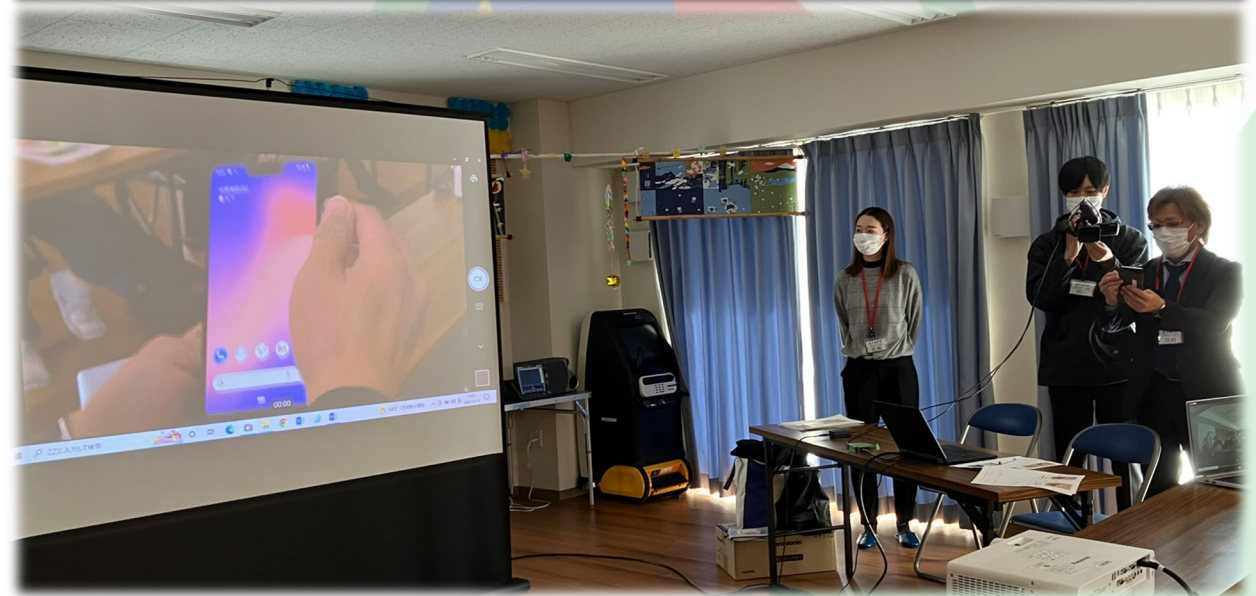
ヒューマンコーチ研修会（トレーニング）

研修会は、ヒューマンコーチリーダーが地域包括支援センターや仙台市社会福祉協議会の助言を得ながら実施。産業界、大学、地域の連携を促すと共に、ヒューマンコーチに必要な知識を提供。実践トレーニングや定期的な報告会も行った。

ヒューマンコーチ研修会の様子



専門学校デジタルアーツ講師との協業イベント
(スマホ教室)



結果

■リーダーの受容性：自己評価インタビュー（概念実証試験終了時）

- ・ イベント企画は楽しい
- ・ 情報検索のために、PCに向き合う時間とLINEの時間が増えた
- ・ 権限、予算が与えられなかったので、活動が限定的に
- ・ 危機管理意識が不十分だった⇒システム不具合への対応不備を反省

■リーダーの効果：

◎高齢者ユーザー（27名）によるコーチの受容性

- ・ コーチのおかげで4か月間の実験が続行
- ・ 共感からの安心感
- ・ 色々なイベントに何度も誘われ、行ってみようという気に
- ・ コーチはあまり役に立っていない、役割やシステム目的がわからない

◎企画した地域イベントの参加者数 47名



考察

- ①リーダーの適性には、協働性、共感カプラス地域イベントの企画力、発信力、調整力が想定できる
- ②リーダーの活動条件として、一定の予算、権限が挙げられる
- ③本システムを安全に使い続けてもらえる持続可能な体制が必要
- ④高齢者ユーザー約30人、コーチ15人に対してリーダー2人の配置は概ね適した割合と考えられる

結論

■リーダーの受容性と効果、確認

- ・リーダー自己評価
- ・ユーザー評価
- ・地域イベント参加

■今後の課題

- ・コーチとリーダーのやりがいと、継続活動できる体制が必要
- ・対象を取りこぼさない支援例：地域活動に消極的な方
孤独を感じている方
- ・ガイドラインづくりと実践、展開





プロジェクト活動終了後：ヒューマンコーチリーダー

自主的なイベント開催で地域貢献

概念実証中、ヒューマンコーチリーダーは新たなイベントを企画していたが、諸事情により実施できませんでした

プロジェクト活動から半年後。自主的に右記の音読会を企画し、告知、音読会、アンケートまでプロジェクトメンバーの手を借りずに行いました

現在も、地域の高齢者とのつながれるイベントに尽力され地域づくりに貢献しています

【音読会の内容】

1) はじめに 10分

「自身の心身の状態を知りましょう」
「音読をするにあたって」

2) 音読会進行 45分

- ① 個人個人で音読(5分)
- ② 対面で交互に音読、良かった点、残念だった点を確認(10分)
… スマホボイスレコーダ活用
- ③ 一人ひとり順番に教室の前に立ち、出席者に対して音読(30分)

3) 参加者交流の時間

参加頂いた皆さまとの交流の時間をとります

4) アンケート記入のお願い

参加頂いたスマートシニアの皆さまが、今後も健康で、明るく、生き生きとした日常生活を過ごすための要望などを伺います。

- ① 「音読会参加者アンケート」
- ② 「スマホ活用に関するアンケート」

今後の講座開催企画立案の参考にさせていただきます。

プロジェクト・スマートエイジング
2024年9月4日

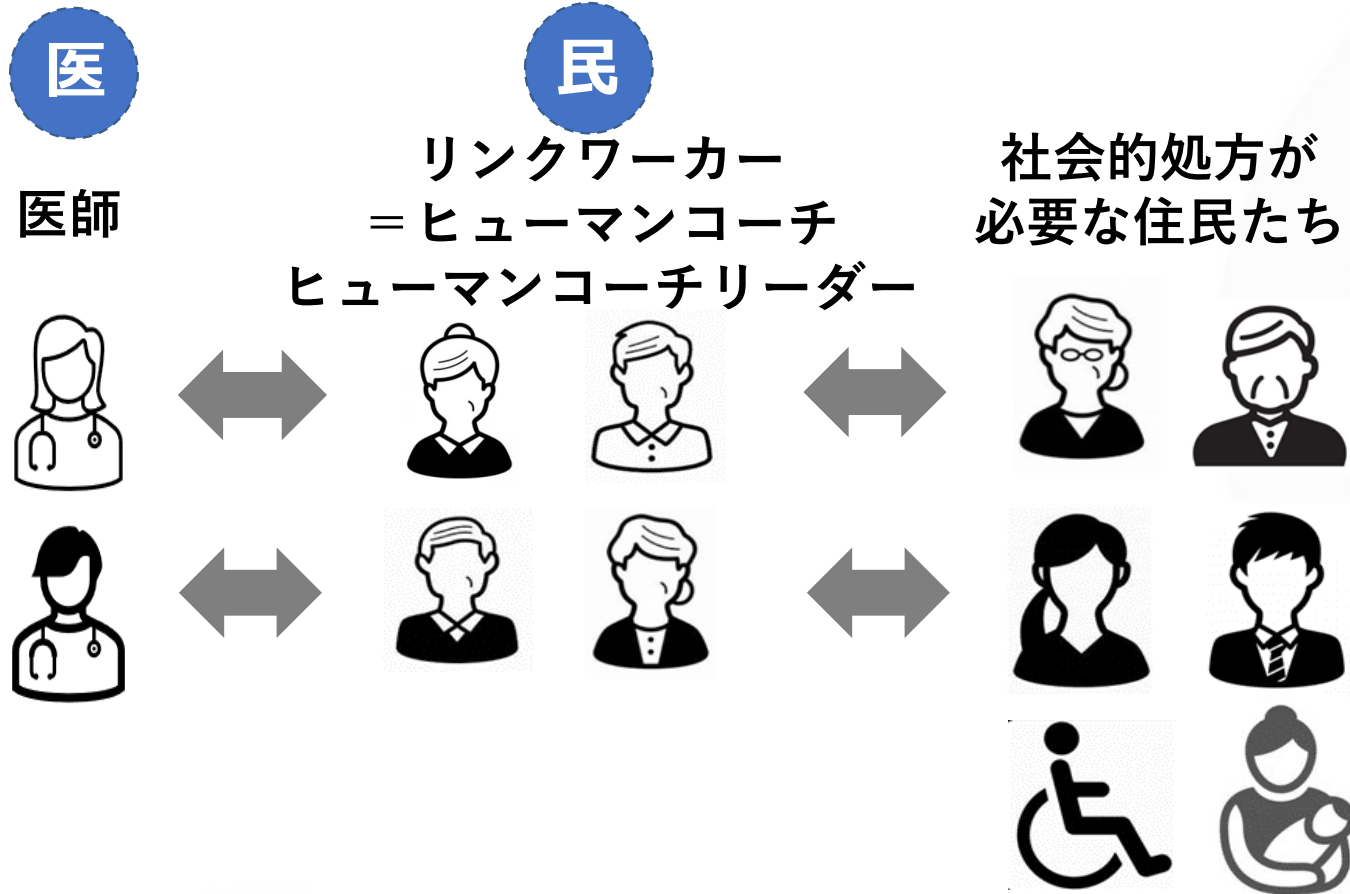




プロジェクト活動終了後：プロジェクトメンバー

医師による**社会的処方**の実現へ

医師が薬と同じように「社会（地域の人）とのつながり」を処方する「**社会的処方**」（英で先行）
ヒューマンコーチャらが医師と地域住民をつなぐ「**リンクワーカー**」の具現化について研究を開始
（東北大学）





EU-JAPAN VIRTUAL COACH FOR SMART AGEING

ありがとうございました



0-I-6 産官学民連携のキーパーソン「ヒューマンコーチリーダー」の展望と課題： 地域コミュニティとAIが共創するまちづくり

大原亜砂子¹⁾、石川美佳²⁾、阿部愛²⁾、鴻巣尚子²⁾、阿部愛実²⁾、オガワ淑水²⁾、
瀧靖之²⁾

1) 株式会社ミサワホーム総合研究所 フューチャーデザインセンター

2) 国立大学法人東北大学 スマート・エイジング学際重点研究センター

【目的】2021年から3年間、総務省「スマートエイジングを目指す日欧共同仮想コーチングシステム」事業で、高齢者のウェルビーイング向上を目指したAIベースの仮想コーチングシステムと、支援員ヒューマンコーチで構築される“e-ViTA システム”が開発された。ヒューマンコーチ（以下、コーチ）は、コーチングと高齢者が同システムを安全かつ継続的に利用できる支援に加え、地域コミュニティへの参加と交流を促進する。本システムを社会実装していくには、地域活動を促進するイベント情報等が適切に高齢者に届けられるプラットフォームと、産官学民の架け橋となる存在が不可欠である。仙台市健康福祉局の協力で、高齢化率が高いエリアで概念実施試験を行うと共に、ヒューマンコーチリーダー（以下、リーダー）の形成と持続可能な役割（適性）についても、可能性と課題を明確にすることを目的に研究した。

【方法】大学のボランティアリストから、2名の70代、男性ボランティアをリーダーとして選出。リーダーの役割の構築は、参加型デザインの手法を用いた。コーチの役割を明確にしていくなかで、どのように動機付けし、サポートを行い、リードしていくか意見を求める「探究」プロセスで進めた。リーダーの受容性については、概念実証試験終了時にリーダーの自己評価をインタビューし、その効果については、高齢者ユーザーによるコーチの受容性（27名）とイベント参加効果を指標とした。

【結果】地域企業協力で開催された健康関連イベントでは47名が参加し、企画側（リーダー、企業、大学）の協業、参加者（ユーザー、コーチ）の主体性とモチベーションの向上に有効に働いた。リーダー自身もイベント企画に意欲的で、日々の情報検索、LINE等はウェルビーイングの向上となった。しかし権限や予算がなかったため、活動範囲は限定的となった。研修方法や試験中のシステム不具合等危機管理への対応不備も反省となった。ユーザー評価からは、コーチがいたから4カ月間の実験を続けられた、共感してもらえて安心感があった、色々なイベントに誘われ行ってみようという気になった、等がある。一方、コーチがあまり役に立っていないとの声や、コーチの役割やシステムの目的がわからない等の不透明さも指摘された。

【考察】①リーダーの適性には、協働性、共感力プラス地域イベントの企画力、発信力、調整力が想定できる②リーダーの活動条件として、一定の予算、権限が挙げられる③本システムを安全に使いつけてもらえる持続可能な体制が必要④ユーザー約30人、コーチ15人に対してリーダー2人の配置は概ね適した割合と言える

【結論】リーダー自己評価及びユーザー評価、地域イベント参加から、リーダーの受容性と効果は確認された。高齢者が負荷なくAIと共生できる地域をつくるには、コーチとリーダーがやりがいをもって継続活動できる体制が必要で、支援対象も取りこぼさないことが課題である。地域活動に消極的な方、孤独を感じている方にも実証試験を行うことで、汎用性ある丁寧なガイドラインとその実践、展開が求められる。